

A History of Slavery and a Future of Fair Trade: The Story of Jute in Bangladesh

TAKAHARA Sachiko[†]

Abstract

Jute, relatively unknown in Japan, is a basic industry of Bangladesh, whose government includes the Ministry of Textiles and Jute. Production began during the colonial period when the English found the climate and terrain to be suitable for its cultivation. Garments made in Bangladesh from jute were sold all over the world, and so its production became a part of the world economy and thus involved in the slave trade during that time. This paper describes the historical background of jute, linen, hemp, and ramie. It also discusses the recent Fair Trade Movement, which concerns itself with the variety of qualitative expressions available for these materials while enabling support for producers and care for the environment.

Jute Works is a workers' union that got its start by supporting women after Bangladesh's war of independence in the making of handicrafts that gave them a stable income and life. This paper concludes that the Fair Trade goods made of jute coming into Japan are a material expression of the sustainability of humanity and the environment.

Keywords

jute, world economy, black art

奴隷制の歴史とフェアトレードの未来 —バングラデシュのジュート（黄麻）の物語

高原 幸子[†]

キーワード

ジュート, 世界経済, ブラック・アート

1. はじめに

ガーナにあるマラム・ドドゥ国立劇場をジュートの布を縫い合わせ、つないで覆った展示が2016年にあった。その作者はガーナ出身

のイブラハム・マハマであり、ジュートが何に使用されているのか、また包まれている建造物がどのような資本で建築されているのか、に想いを馳せてこの作品を制作していた。

[†] s-takahara@seiryu-u.ac.jp (Faculty of Humanities, Kanazawa Seiryu University)

ジュートの袋は、バングラデシュで生産され、主にカカオの袋としてガーナに運ばれるが、その過程では一度きりしか使用されない。しかし、ガーナのローカル市場においては、二次売買をされ、穀物などを運搬するために使用される。また、女性たちが名前やシンボルを用いて、何度も何度も使うという。(マハマ pp42-43)

フェアトレードを実践している団体などにおいても、コーヒーという主要なフェアトレード産品を取り扱うなかで、その豆を仕入れて運搬する麻袋がそのまま廃棄されることにやるせない想いを抱き、皿洗いのスポンジの代替品としてジュート素材を使用する製品にしているところも複数存在する。

本稿では、こうしたジュート（黄麻）に着目し、その生産と流通、リサイクルといった過程から導きだされる持続可能性と、その素材そのものがアートという物質表現となるということについて議論しようとしている。また、フェアトレードの製品を販売している第三世界ショップ、シャプラニールといった長年実践をしているNGO（国際協力団体）では、小物やかばんとしてこのジュートの素材を生かした製品を取り扱っている。ジュートには、綿との類似点もあるが、主に紐や袋といった、より生産品を包んだり運んだりするための強固な力強い素材としての役割もある。

こうした物質表現としての側面から、敷衍して素材をめぐる経済状況を歴史的に世界経済に遡って考察する。現状のフェアトレードという概念からは、グローバル規模で流通する製品の生産者への支援として、製品を購買するという倫理的行為を思い浮かべるが、主に貿易商品における一次産品は、産業の発展に伴って、決して「フェアである」とは言い難い生産状況を生み出した歴史がある。布の栽培と紡績業の発展は、資本主義の要となる産業を形成してきているが、その起源には奴隷貿易と奴隷制が存在す

る。布製品の生産に関して、まずは綿と麻との栽培、生産の歴史を辿りながら、産業の発展とフェアトレードという考え方に合致する素材としてのジュート（黄麻）の議論へと流れを捉えていくことにする。

2. 布の栽培と世界経済

衣食住の「衣」に関わる物事は、実は往々にして世界経済と密接につながっている。特に、綿花の栽培は、グローバル資本主義という経済体系が成立する素材ともなっている。しかし、こうした見方に対して、イギリスの産業革命を起点とする貿易のグローバルな展開以前の貿易の状況、その歴史的経緯と連動するが、別の交易の可能性を見ることも可能である。

インドからの綿製品、アフリカからの奴隷、カリブ諸島からの砂糖がグローバルな規模で複雑な商取引を通じて動き回っていた時代は、16世紀から18世紀にかけてである。インド綿布は、こうした大西洋経済が編成される以前に、高度な染織技術を持ち、中世前期から後期にかけて西アジアとアフリカから中国にいたる広大な諸地域に棉の栽培、綿紡績・綿織布の産業が消費文化を作り上げていた。(深沢p29)

19世紀、イギリスの綿工業の台頭をはじめとする大西洋経済の変化において、西アフリカと南アジアには、相互の経済関係が存在し、インド綿布の需要が引き続いてあった。西アフリカ史では、1850年代までの1世紀は、欧米諸国の奴隷貿易廃止と連動し、沿岸部が大西洋奴隷貿易から「合法的」貿易（奴隷以外の換金作物貿易）へと移行し、他方で内陸のサヴァンナ地域ではムスリムによるイスラーム国家建設運動（ジハード）が展開していた。(小林p42)

換金作物は、主に一時産品であり、鉄道や機械の潤滑油として用いられるほか、蠟燭や石鹼などの製造の原材料となったパームオイル、やはり石鹼の原材料になる落花生、繊維製品の染色・捺染する際の糊となる用途のほか、医薬品

や菓子類、製紙などでも用いられるアラビアゴムなどがヨーロッパ向けに輸出されていた。(小林p43)

一方において、セネガルでは、19世紀半ばにおいて、イギリス製品よりも、インド綿布の輸入量が徐々に増加していた。「ギネ」と呼ばれたインド産藍染綿布は、貨幣のように、アラビアゴム貿易の交換媒体として存在していた。消費者は、遊牧系国家の住民とされ、アラブ系、ベルベル系、そして黒人から構成されていた。(小林p113)

南インドにおいては、コロマンデル海岸が、西アフリカ市場向けのインド綿布生産の中心であった。インドの織物は、まずヨーロッパの港に輸入され、それから西アフリカに再輸出されており、そこにはイギリス東インド会社が携わっていた。南インドの職工は、前払い制度と言われる制度のもと、現金の前払いから6-8週間後にサンプル布が商務局に届けられ、残りの布は半年以内に送られるようになっていた。「問屋制家内工業」では、材料が職工に渡されるものだが、それとは異なり、前払い金の用途を、自らの裁量で生計に含めて決定することができ、ある程度の自立性を保つことができたという。(小林pp171-172)

これは、現在のフェアトレードで布製品や工芸品の制作においても、「前払い」という仕組みを保つことの重要性が説かれている点があり、歴史から継続している観点だと述べる事が出来よう。

需要の拡大に伴い、綿は家庭から特にアジアにおいては作業所での生産が一般的になった。インドでは、主に遠距離貿易向けに布を織り、自国と外国双方の統治者や富裕な商人に綿布を提供した。ダッカ(現バングラデシュ首都)では、織り手は厳しい監督下でムガール宮廷に献上するモスリンを生産した。自家消費用の布を織る織り手とは対照的に、遠距離貿易にかかわる織り手は一部の地域に集中して居住してい

た。なかでもベンガルは繊細なモスリンで、コロマンデル海岸はチンツとキャラコで、スーラトは種類を問わず丈夫で安価な織物で有名であった。作業所が一般的になるにつれ、もっぱら市場で売るため個人で布を織るタイプの織り手が新しいタイプとなり、たいいては男性であった。しかし、市場向けに特化した織物の生産を主に担っていたのは、農村部の家庭であった。商人資本によって統合された下請けネットワークに依存していたからである。(ベッカート pp54-55)

インドの綿布がヨーロッパの商人の手に委ねられたのは、1498年ヴァスコ・ダ・ガマがインドの港に入港し、交易の許可を得たときからであった。最初はポルトガル商人であったが、のちにイギリス東インド会社、オランダ東インド会社、デンマーク東インド会社が設立され、こういった貿易会社に共通していたのは、インドで綿織物を購入し、東南アジアで香辛料と交換したりしながら、ヨーロッパへ持ち帰ったことである。(ベッカート pp71-73)

17世紀の初頭には、ヨーロッパの貿易業者と商人はベンガルの港湾都市ダッカにおける貿易で重要な役割を演じていた。ダッカは何世紀にもわたり、世界で最高級の綿製品の供給地であった。1621年イギリス東インド会社はおよそ5万点の綿製品をイギリスに輸入していた。1766年には、イギリス東インド会社の輸出総額の75パーセント超を占めていたという。ダッカにある在外館は、綿布を購入する仕組みを次のように記している。イギリス商人は貿易船が到着する8-10か月前に綿布の調達を多数のバニャに下請けに出し、その際に希望する品質、デザイン、価格、納期を提示した。アフリカやヨーロッパの消費者は、特定の価格で買える特定の綿織物を要求した。バニャがさまざまな中間業者に現金を前渡しすると、中間業者は村から村へとまわって個々の織り手に資金を前貸しし、綿布を完成させる契約を結んだ。完成

した綿布がダッカの在外商館に戻ってくると、イギリス商人が製品に等級をつけ、船積みの準備を整えるという。こうした生産システムにおいて、織り手は自分のリズムと段取りで仕事を進められていたし、自前の道具を所有し、自分の気に入った相手に製品を販売することもできた。(ベッカート pp74-76)

こうしたインド製綿織物は、イギリス産業革命を先導した綿業の形成期には、インド製キャラコの輸入代替化というしくみがあり、毛織物ではなく、リネンとともに綿業の発展の先達として寄与したと言えるだろう。キャラコはその薄さ、軽さ、染めの鮮やかさによってイギリスの人々を驚かせたという。こうしたキャラコに代替する布として、リネン、麻綿混織、純綿の商品化が初期綿業において追求されたという。(竹田 pp27-61)

3. 麻布の様相

グローバル資本主義のなかで、綿業が主要産物として発展したプロセスにおいて、綿と共に麻が混ざり合っていたということは、先述したとおりである。アイルランドやフランスにおいて、リネンが主要な繊維産業になっていた。

リネンは、近代の産業化以前の古代から衣服発見とともに存在していた素材でもある。古代エジプトにはリネン産業があり、栽培、繊維の準備、紡績、織布は主に男性の職人によって支えられてきた。リネンの加工は手仕事から工業へと発展し、また地元の需要を満たす地域的な生産から全国的な工業となり、インド、ペルシア、のちにはギリシア、ローマへと輸出されるようになった。ファラオたちは大がかりな王立工房を都市に設置し、神殿や建造物と同様にリネン産業は、奴隷たちの血と汗の上に成り立っていた。(ルール pp8-10)

リネン産業が古代エジプトで発展した理由には、宗教儀式的象徴的役割について考える必要がある。元来、リネンの使用は、概して崇拝的

儀式にもっぱら限られていた。白色は純粋さを表すことから、文明の黎明期においてリネンは神聖の象徴として聖職者の衣服または神殿の儀式で取り上げられていた。古代エジプト宗教に限っては、リネンは繊維のなかで最も傷みにくく、靈魂は不滅なため現世の肉体の形を維持しなければならない、という考え方に合致していた。そのため、エジプト人は死後の人体にリネンの包帯を巻いた。ファラオのミイラに関しては、最も長いもので一千メートル分の布が使用されていた。墓の中には織機までもを納め、必要に応じて故人が自らの保存を図れるようにしたという。聖職者と死者の衣から、リネンは王、のちに領主の装いとなり、一般的に使用されるようになったのは、さらに時代を下ってからである。(ルール pp10-13)

また、キリスト教の聖骸布としてもリネンが使用されていた。聖骸布は、4.36メートル×1.10メートルの長方形のリネン布で、文献によると、磔後のキリストをこの上に寝かせたという。頭の上で布を二つ折りにし、半分は遺体の全面を覆っていたとする。15世紀に発見され、保管されているこの屍衣は、西暦起源の頃のものであると識別され、磔にされた人物の全体像が頭をはさんで対称的に残されている。この布の種類は、リネン100%の綾織りで、斜文線の角度は45度の杉綾と呼ばれる。糸密度は縦糸が一センチメートルあたり約40本、横糸が25本となっている。エジプト人の技術を大幅に取り入れたシリアに由来するものと考えられている。こうした奇跡の「写真」とも呼べる聖骸布が残っているのは、おそらくリネンの安定性と吸水性といった特性のおかげだと言える。(ルール p13)

リネンに由来する生産物には、主に二つのものが知られている。衣服に使用される「糸」と、人々の住まいの壁を装う「油」である。どちらの装飾のために使用され、画家の絵筆によって一つの作品と化すこともあった。キャンバスは

「リネン糸」を原料とし、絵具は「亜麻仁油」を原料としているところからである。しかし、一般的に採油用のリネンは繊維用に比べて草丈が低く、分岐が多く、栽植密度が低く、南の地域で栽培されるという。また茎に含まれる繊維量は少なく、繊維は粗剛で脆い。逆に「繊維用のリネン」から採取される種子の量は著しく少なく、種子の油分含有量は「種子用のリネン」に比べて少ない。(ルール p26)

では、日本における麻糸、麻織の歴史はいかなるものだったのだろうか。日本で使われてきた天然素材において、麻と絹は弥生時代から使われていた。木綿は、近世になってから本格的に栽培されるようになった。明治時代になると化学繊維が開発され、一大産業となった。

弥生時代において、絹の利用は北部九州、山陰といったごく限られた地域であり、より広く利用された素材は麻であった。麻の織物はすべて平織りであり、縦糸と横糸が一本おきに交差していた。弥生時代では平織りよりも複雑な組織の織物はまだ見つかってはいないという。

麻には多くの種類があり、日本で主に利用されてきたのは、大麻(アサ、タイマ)と苧麻(カラムシ、ちょま)の二種類である。大麻は、戦後に大麻取締法の影響を受けてほとんど栽培されなくなったが、以前は各地で栽培されていたアサ科の植物である。もう一つの苧麻は、イラクサ科の植物である。大麻は一年草で、種をまいて育てるが、苧麻は多年草で、刈り取っても次の年には新しい芽が伸びてくる。

アジアにおける大麻と苧麻の栽培は、韓国では両方を利用するが、中国のミャオ族やベトナムのモン族は大麻、台湾では苧麻のみである。中国では大陸の山岳地帯などで大麻を利用する事例が多いという。特に、焼き畑を行う少数民族には、居住地を移動するなかで大麻を栽培する歴史がある。一方において、台湾や沖縄は温暖な気候のために年に何回か刈り取ることができる苧麻が使用されている。(はたや記念館ゆ

めおーれ勝山編集 p8)

また、アジアには、麻を織る腰機の広がりが見られる。弥生時代と同じ時期、朝鮮半島では初期鉄器文化の時代に、横糸を打ち込む道具が出土している。中国の雲南省では、紀元前200年ごろのお墓に副葬した青銅器に機を織っている人の像がつくられている。織り手は全員女性で、機織りが女性の仕事として定着していたことがわかる。(はたや記念館ゆめおーれ勝山編集 p14)

富山県西部の砺波地方でも古くから八講布と称された布が織られていた。人々は苧麻や大麻を栽培し、その皮の繊維から糸を積んで織機で布を織り植物の葉で布を染め、そして縫った。この糸を積み布を織るのは農閑期の冬の間の女たちの仕事だった。江戸時代は、麻布の集積地として高岡、戸出、そして江戸後期には福光の商人が布を扱い、いつしか福光麻布と呼ばれるようになった。しかし、江戸時代には全国で木綿の栽培が始まり、肌への感触が柔らかく暖かい木綿は、麻に代わり求められるようになり、麻布の生産は減少していった。東北地方は木綿の栽培に適さず、明治に入り流通が改善される以前は麻布は主力であったという。また近江の麻業は600年も続いた郷土の伝統産業であり、中世から近代に続く天然繊維の流通を担っていた。

このように、天然繊維が化学繊維の登場や機械化によって盛衰が見られるなか、フィリピンでは、戦前に麻栽培を行う地域ができており、それを日系人が担うという状況が生まれていた。スペイン統治時代から米国統治になっていたフィリピンでは、日本の朝鮮、満州、華北への侵略の路を懸念していたが、ダバオは日本人の自治があり、比較的自営農民が農園を拡大していた。この農園では、タガログ語に語源を持つ「アバカ麻」が栽培されていたが、その麻の最大の用途は軍艦のロープであった。ほかに、日本における用途として和紙と着物の小間物

(麻織の真田紐)があった。(鶴見 pp45-55)

4. バングラデシュのジュート (黄麻) 製品

バングラデシュは、かつて東ベンガルと言われた地域と重なり、そこではイギリスをはじめヨーロッパに輸出された綿(綿布)、生糸、藍、ジュート(黄麻)、茶などの商品作物が栽培されていた。英領インド、パキスタン時代を通じ農業が産業の中心を占めており、農産物輸出によって外貨獲得に貢献した地域でもある。上述したヨーロッパとの交易、イギリス植民地支配という歴史的条件と肥沃な熱帯デルタ低地という自然条件により、ジュートは広範に普及していた。(河合 pp170-171)

安価で強靱な繊維原料であるジュート(黄麻)は、コーヒー豆、砂糖、大豆、綿花、チリ硝石などの一次産品輸送用の梱包用袋(麻袋)の原料としての需要が19世紀なかば以降から急増した。また陣地を築く砂袋にも用いられ、戦争が勃発するとジュートの需要が増えた。1920年代後半の輸出による外貨獲得額では、ジュート原料と麻布が約25%、綿花と綿布は約20%を占めるようになった。ジュートはこうしてバングラデシュ最大の輸出品目となり、こうしたモノカルチャー型の産業構造は、1947年に英国から独立してパキスタンになった際も、1971年に独立以降1980年代なかばまでのバングラデシュにおいても変化はなかった。また、居住に適さない低湿地や中洲、氾濫原などジュート栽培の土地の開拓は、ムスリム農民によって担われていた。(河合 pp172-173)

ジュートは、亜熱帯で栽培され、4か月程度で収穫可能な繊維質の植物であり、高さは2-3メートルほどに成長する。冠水地域で発育する種類もある。和名では黄麻であるが、英名ではWhite Juteと呼ばれている。日本で目にするジュート製品は、主に麻紐またはコーヒーの麻袋だが、他にカーペットの裏地としても用いられている。(坪田 p48)

ジュートは、砂糖やコーヒーなどとともに、加工されずに貿易される一次産品である。こうした一次産品が晒される急激な価格変動に対処するために、製品の多様化が図られている。バングラデシュに多く存在するNGOなどが、ジュートを用いた室内装飾、お土産用バッグ、衣服などの様々な用途に展開している点は、ジュートを高付加価値商品にし、技術を生み出す支援策を行っているためと理解できる。

また、農民の日常生活では、紐や乾燥した幹は、農作物の支柱、住宅の土壁の芯、さらに炊事用燃料などにも使用される。近年では、分解され土に還元される天然素材として見直され、紙、手工芸品、服地から切土法面・軟弱地盤の表層処理用シートや植樹の根・幹まき用布などの新たな需要を作り出す努力も続けられている。同じ属のシマツナンの葉は野菜として食されており、日本でもモロヘイヤとして食卓に提供されている。(河合 p173)

インドおよびバングラデシュ両国のジュート生産の世界シェアは1961年から2011年まで平均で87.9%であり、イギリス植民地であった19世紀以来世界のジュート生産において不動の位置を占めている。(坪田 p51) 輸出品目としては、独立当時の1970年代は輸出額の約70%をジュート製品が占めていたが、衣料品の輸出が1980年代から伸びているため、現在はジュート産業は衣料品に次いで2位の輸出額となっている。

ジュートの産業の歴史としては、イギリスが産業革命期に東インド会社を通じてロシア産リネンに代わる原料を探しており、麻くず(tow)や麻(hemp)などが試される中、黄麻(jute:1825~)の活用が試みられ、1848年頃にはジュート加工技術が確立した。ジュートはもともと国内消費のために少量の生産が行われていたが、1870年までには新しい商品作物としてジュートの大規模な耕作が行われるようになった。ジュート加工とその輸出は西ベンガル

のカルカットに集積していたが、英領インドからの独立、パキスタンからの独立により、チッタゴンを通じた原ジュートの輸出が行われた。東パキスタン（バングラデシュ）にはジュート工場が存在しなかったため、西パキスタン企業により、付加価値のあるジュート製品の製造工場が設立された。1971年の独立を期にこれらの工場の国営化がなされたが、業績は芳しくなく、1982年から1983年にかけて民営化がなされた。（坪田 pp60-63）

植民地時代から続くジュート産業は、1960年代の合成繊維の台頭により、世界の需要は縮小傾向にはなっているが、1990年代から少しづつ環境意識の高まりに伴い、ジュート製品への注目はなされていると言えるだろう。

5. ブラック・アートの定義

「ブラック・アート」という言葉は、1960年代にアメリカで公民権運動へと至るアフリカ系アメリカ人共同体による文化的・政治的・社会的運動の流れを受け、そこで展開される芸術表現を形容するために積極的に用いられた「黒人の美学 (Black Aesthetics)」,そして「ブラック・アート (Black Art)」に起因する。それ以前の20世紀初頭にアフリカやオセアニア由来の仮面や彫像に新たな美的価値をと可能性を見出し、「ニグロ・アート」と名付けてキュビズムやプリミティヴィズムを牽引してきた流れとも連動する。「ニグロ・アート」は、明確にアフリカの造形物に対する他者からのカテゴライズであり、多様な文化的差異を消し去ってしまうような言葉でもある。だからこそ、後者が歴史的過程と闘争のなかで獲得しようとした意義を引き継いでいく意思は必要になるだろう。（柳沢 pp137-144）

冒頭で述べたイブラハム・マハマは、やはりジュートの袋を通じて、単純化されぬ、複雑な、田舎から都市部に移住したりしながら、市場で働いている人々の生の様相の背後にあるも

のを浮かび上がらせる。表面の布は表層的なものかもしれないが、そこから歴史やナラティブ（人々の語り）を知っていくことはできるだろう。

ブラックは、もともと肌の色を意味している言葉であるが、そのみでブラック・アートは規定されない。その背景には、奴隷制と植民地支配の歴史が混在し、ポストコロニアル（植民地支配以後の）な遺産と格闘する表現が現れてくる。

6. ジュート（黄麻）・ワークスの持続可能性

第三世界ショップというNGOはバングラデシュへの支援活動を継続して行っているが、そこでカウンターパートとなるバングラデシュのNGOから、ジュート素材のハンディクラフトを仕入れてフェアトレードフェスタなどにおいて販売している。

フェアトレードであると認識されているその一つのNGOの試みを紹介したい。

1971年の独立戦争ののち、戦争未亡人、戦争犠牲者、周縁化された農村女性たちへの支援を行ったCORR（救済と社会復帰のためのキリスト教グループ）は、回復と復興のためのプログラムを行った。アメリカ合衆国をベースにしたケア（CARE）という開発NGOの助言により、CORRはすでにカトリックの修道女によって運営されていたバングラデシュのハンディクラフトの職業訓練センターにおいて、農村のグループでジュートの小物づくりのトレーニングを始めた。

このグループは、特に女性たちに着目し、農村の職人たちを組織化して協同組合を創設し、そこから英国のオックスファム（Oxfam）というフェアトレードを開始したNGOに販売経路を作り出した。

生産者たちは、現在バングラデシュの16の区域において、220の協同組合を持ち、女性が4856名、男性が160名で構成されている。次の

5 項目のビジョンを共有している。

- (1) 経済活動において職人協同組合が主流の機能的組織となる。
- (2) 職人たちが、基本的な収入を得るための仕事を年間を通じて確保し、機関（組合）の質的成長を約束する。
- (3) フェアトレードの促進。
- (4) 貿易の拡大と成長。
- (5) 教育や安全な水の確保、衛生、環境、健康などコミュニティの生活条件を整え、緊急に備えた基金の確保。

以上のビジョンを共有しながら、特に女性たちの収入向上を伴う社会経済的側面を強調している。地域の素材を用いながら、家事活動の合間を見つけ、ハンディクラフトを制作し生活資金にしていく。家における雇用と市場を結びつけ、労働に対する正当な対価の返還を保障するという。こうすることで、搾取ではなく小さい規模ながらも独立した稼ぎが達成でき、それが家庭や社会において女性が尊重される場をもたらすという。

また、「ジュート・ワークス」という名称でグループの基金を作成し、この基金を活用して経営することで、持続的に利益をもたらすしくみを作っている。基金をグループでどのように使用しているか、適切なジュート資材への用途か、記録し評価をしている。また、こうしたなかにおいて、プライマリーヘルスケアとして、ビタミンのカプセルを生産者に届け、特に妊婦には特別なケアをしている。入院や手術、重篤な病気の場合における財政的な支援も行っている。また、自然災害や危機における被害からの回復のための資源を備蓄している。

さらに、女性の参加関与を増やし、仕事に関する個々の自覚化や環境への配慮、製品技術の教育、小規模融資のプログラムといった観点も推進している。特に、小規模融資は1981年から行われ、6%のサービスチャージでどのような生産目的でも貸付金を三年で返還するしくみ

が整えられた。4000人を超えるメンバーが資材への投資や小規模ビジネス、種子購入、家庭菜園、家畜や農園経営に利用している。

ジュート・ワークスのメンバーの、ある一人の女性の言である。

「私の夢は現実になりました。私の悲しみはどこかへ行き、希望が実現されました。私たちの多くは貧しかったのですが、誰もそれに対して非難をしていません。私たちは、収入を得る仕事によって生活を変化させることができるのです」。

彼女は、12歳の時に結婚をし、夫は土地のない日雇い労働者であった。彼は他人の土地を耕す仕事をしていましたが、家族を養うことはなかなかできなかった。彼女は自身の収入を得る資源がなく、家で家事をして過ごしていた。彼女の義理の母はジュートの小間物を作っており、それを観て、初めて彼女は家族のために稼ぎを得たいと思った。

「義理の母は、長い間ハンディクラフトを制作していました。彼女はかなり技術を備えたハンディクラフトの生産者です。そしてそれを地域の市場で売っていました。彼女は私を訓練し、どのように伝統的な家における制作物が創れるのかを示してくれました。すでに彼女は歳を取ってしまい、もうハンディクラフトは制作できませんが、今、私はハンディクラフトを制作して、毎月収入を得ています」。

このように、ジュートの小間物類が女性たちのエンパワーにつながることは、計り知れないものがあるだろう。

7. おわりに

ジュート（黄麻）は、世界市場において、綿

ほどまでに経済を牽引する産品であったとは言いが、多様な用途のなかには、人間が環境と共生しているための素材としての意味に、注目される点がある。

ガーナでも、カカオの麻袋として貿易で使われるだけではなく、ローカルな市場で名前をつけて象徴的に使用されるということもあり、フェアトレードにおける物品の象徴性を思い起こさせる。ジュート・ワークスの鍋敷きや小物入れなどは、日常に使用するものであるが、その色や素材から喚起される、その生産に携わった人々の悲喜こもごもの手作業は、長くその小物を使い続けようという想いに直結する。

素材としての麻は、太古から続く布製品であったが、綿や化学繊維によってとってかわられる素材でもあった。しかし、その素材として、リサイクルされ、日常文化に色を添える涼し気な風貌は、引き続き使用するセカンドベストな小物としての価値を有しているとも言えることが出来るであろう。特に、皿洗いのスポンジの代わりであるジュート布のように、家事に毎日使用するモノが、世界のジュート製品とそれに携わる人々とのつながりを共感させる物質であることは、何物にも代えがたい持続可能性を秘めていることだろう。

引用（または参考）文献

CORR-The Jute Works—A Trust of Caritas-Bangladesh (www.cjwbd.com) (最終閲覧日 2023年8月31日)

深沢克己「更紗のたどった道—インドから世界へ」『季刊民族学178』2021年10月

はたや記念館ゆめお—れ勝山編集・はたやブックレット9『麻の糸・布と腰機—弥生時代から現代につなぐ麻糸・麻布づくりと腰機』2020年「イブラハム・マハマ/インタビュー」『美術手帖 Vol.75 NO.1097 2023.04-「ブラック・アート」とは何か?』2023年4月, pp42-47

ジャック・ルール著, 香山学監修/尾崎直子訳『リネンの歴史とその関連産業』白水社, 2022年
小林和夫著『奴隷貿易をこえて—西アフリカ・インド綿布・世界経済』名古屋大学出版会2021年
福光麻布織機復刻プロジェクト『越中福光麻布』桂書房, 2016年

近江麻布史編さん委員会編, 渡辺守順『近江麻布史』雄山閣, 1975年

大橋正明, 村山真弓編著『バングラデシュを知るための60章〈第2版〉』明石書店, 2009年(河合

明宣第32章「藍・ジュート(黄麻)・紅茶—商品作物の歴史」pp170-174)

スヴァン・ベッカー著, 鬼澤忍・佐藤絵里訳『綿の帝国—グローバル資本主義はいかに生まれたか』紀伊国屋書店, 2022年(Sven Beckett Empire of Cotton—A Global History 2014)

竹田泉著『麻と綿が紡ぐイギリス産業革命—アイルランド・リネン業と大西洋市場』ミネルヴァ書房, 2013年

坪田建明「第一章ジュート:知られざる工業国バングラデシュ」『アジア研選書37』日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2014年, pp47-83、(<http://doi.org/10.20561/00031730>)

鶴見良行『バナナと日本人—フィリピン農園と食卓のあいだ—』岩波新書, 1982年

柳沢史明「『ニグロ・アート』とブラック・アート:誰が文化を規定するのか」『美術手帖 Vol.75 NO.1097 2023.04-「ブラック・アート」とは何か?』2023年4月 pp137-144)

